

社会を形づくるデザインの学び方 2 :
東京藝大でつくる社会的デザインの教育研究プログラム

Design for Societal issues 2:

Exploratory programs on Societal Design at Tokyo University of the Arts

2017 年度 東京藝術大学グローバル共同カリキュラム

フィンランドから 2 名の研究者を招いて行ったショートユニット授業の記録

2017 Global Partnership Curriculum at Tokyo University of the Arts

Tokyo GEIDAI + Finland Design Short Unit 2017 : Social Design Course

01.

概要

Outline

この冊子のこと

社会を形づくるデザインは、そのデザインを社会の営みの中におくことが重要です。それによってデザインが文化的実践となり、はじめて社会実装に結びつくからです。私たちは、フィンランドから招いた研究者とともに社会的にデザインを展開するアプローチをこの授業で探究しました。

この冊子は、授業「Tokyo GEIDAI + Finland Design Short Unit 2017 : Societal Design Course 社会を形づくるデザイン」の記録です。東京藝大が展開する海外大学との連携教育「東京芸術大学グローバル共同カリキュラム・ショートユニット」プログラムとして実施しました。その授業全体をふり返ることで、社会をモチーフにする新たなデザインとその学び方を考えてみるきっかけになることを願っています。



授業のねらい

美術デザイン教育研究の領域を「産業から社会へ」拡張することは、今日、世界の美術大学が取り組むグローバルな課題となっています。この授業のねらいは、社会的課題に貢献するデザインのスキルと知識をもち、世界で活躍できるデザイナーを育成すること、あわせて当該デザイン領域の教育研究プログラム開発の可能性の探索です。また、授業は、国際共同カリキュラムとして、北欧デザインの中核を担い「社会と人間を中心とする参加型デザイン」を先導するフィンランドのデザイン教育研究者 2 名を招聘し、彼らの指導のもとで参加体験型のプロジェクトとして行いました。

授業のテーマと学び方

この授業の目標は、参加した学び手たちが、デザインの対象としての社会的な課題に気づくことです。社会的課題の題材を「家族」としました。「家族」は、参加するすべての学生がそのメンバーとして直接に関わる対象であり、出産から子育て、就学、就職、結婚、高齢化などライフイベントの核であり、また今日わが国の社会創生が抱える大きな課題でもあります。

プロジェクト展開のために「一緒になったふたりが家族になっていく過程」に注目することにしました。それは、デザインすることの視座を、「being (在ること)」から「becoming (成ること)」へ拡張したいと考えたからです。「家族はいかにあるべきか」ではなく「いかに家族になるのか How to become a family」という題目がそこに生まれました。もうひとつ注目したのは、デザインする新たな仕組みを「物語」として表現することです。フィンランドから来た教師たちはそれを「Design Fiction」と呼びました。

このデザインの学びをより力強いものにするために、「そこへ行く・語りを聴く・彼らとつながる」というデザイン方法を導入しました。学生たちが「家族をつくる」人びとのいる場所へ行き、出会い、話を聴く活動を学びのプログラムの重要な部分としました。このプロジェクトでは、訪問先の組織や家族、個人を「デザイン・パートナー」と呼びます。このプロジェクトに参加いただいたデザイン・パートナーのみなさまに感謝します。

授業では次の 4 つの層の学びが得られるものとしました。

- 参加学生たちが、美術デザイン教育研究領域の拡張に気づき、そこでの新たな問題の設定とデザイン展開のプロセス、そしてそれらを支える方法と方法論を学ぶこと
- 本プログラムで使用する言語を「英語」にすることで招聘教員と学生たちの直接対話が生まれ、そこから北欧デザインの社会的文化的な背景を体験的に学ぶこと
- 参加学生たちが、地球のどこでも生活できグローバルなデザインの専門家として育つことの意義に気づくこと。そうなれる可能性の芽を掴むこと
- このプログラム実施をとおして本学教育研究の国際化が促進されること

プログラム名称

Tokyo GEIDAI + Finland Design Short Unit 2017 : Societal Design Course
東京藝術大学グローバル共同カリキュラム・ショートユニット・プログラム

授業テーマ

社会を形づくるデザイン：家族のできかた
Design for Societal Issues: How to become a family

会期

2017年9月19日(火)から9月27日(水)、9日間

実施場所

東京藝術大学 上野校地 総合工房棟3階 デザイン科プレゼンテーションルーム

募集

ポスターで告知：7月
募集期間：7月17日(月)～23日(日)

The flyer is a bilingual document. At the top, it identifies the event as a workshop for the 'Design Short Unit program on Societal Design' held from July 18 to July 23, 2017. The main title in Japanese is '社会を形づくるデザイン：家族のできかた' (Design for Societal Issues: How to become a family). The flyer lists the organizers as Professor Mika Nieminen and Professor Sanna Saarelma from the University of Applied Arts in Helsinki. It also includes a list of program content, such as 'Design Fiction', 'Design for Societal Issues', and 'Design for the Future'. The flyer is designed with a clean, modern aesthetic, featuring a central illustration of a family and a color palette of blues, greens, and oranges.

授業の組み立て

- ・5つのグループで構成
- ・使用言語は英語（必要に応じて日本語）
- ・時間割の基本型は、午前9時からの3時間、午後1時からの3時間の合計6時間で構成
- ・学生と教員はワークショップの前と開催中にデザインパートナーとの対話の機会をもった
- ・イスラエルのベツァルエル美術デザイン大学から学生3名が参加

活動プログラム

9日間の活動の組み立て

第1日：9/19（火）

午前：公開講座「社会を形づくるデザイン：家族のできかた」

午後：ガイダンス、テーマ紹介、テーマの表現と理解、家族のできかた素描

夕方：ウェルカムパーティー

第2日：9/20（水）

午前：素描の発表と議論

午後：家族との対話、家族のできかたに会う・その1、記録

第3日：9/21（木）

午前：対話の記録発表

午後：家族のできかたに会う・その2、記録

第4日：9/22（金）

出会ったかたちを視覚化する、整理する、本質を見出す

第5日：9/23（土）

各チームでできる作業

第6日：9/24（日）

昼から、石田貴宏さん宅（谷中）でポトラックパーティ

各チームでできる作業

第7日：9/25（月）

家族のできかたをまとめる、プレゼンテーションづくり

第8日：9/26（火）

最終プレゼンテーション、お茶会

第9日：9/27（水）

プロジェクト全体のふり返り

活動記録の公開サイト

<https://tua-finland-socialdesign.tumblr.com>

デザイン・パートナー※

- ・子育てプチカフェ、たいとこネット、台東区生涯学習センター（台東区西浅草）
- ・下町こども食堂 みらい、たいとこネット（台東区松が谷）
- ・台東区子育てを支え合うネットワーク（たいとこネット）石田真理子さん他（台東区）
- ・台東ババコミュニティ 石田貴宏さん家族（台東区谷中）
- ・新城まちなカレッジ、新城 Pasar Base 坂井美穂さん、関川房代さん他（川崎市新城）
- ・八王子ファミリーフェス、みんなのキャンパス 田中久乃さん他（八王子市旭町）
- ・日立製作所 東京社会イノベーション協創センタ 田中久乃さん他（港区赤坂）

参加者

- ・東京藝術大学 Student at Tokyo University of the Arts (Tokyo GEIDAI)

デザイン Design program

学部3年 B3：5名，学部4年 B4：2名

修士1年 M1：3名，修士2年 M2：1名

先端芸術表現科 Intermedia Art program

学部1年 B1：1名，学部2年 B2：1名

修士1年 M1：1名，修士2年 M2：1名

- ・ベツァルエル美術デザイン大学 Student at Bezalel Academy of Arts and Design：3名
- ・東京工業大学 Student at Tokyo Institute of Technology (Tokyo Tech)：2名
- ・学外参加者 Guest participant：1名

- ・フィンランドからのデザイン教育研究者 Invited teacher from Finland：2名
- ・東京藝術大学の教員 Teacher at Tokyo GEIDAI：5名

- ・9/19（火）公開講座参加者（学内外）Audience of the Open seminar：32名
- ・9/27（水）最終発表会参加者（学内外）Audience of the Final presentation：12名

指導

- ・招聘教員 Invited teacher

Kari-Hans Kommonen

Andrea Botero

- ・東京藝術大学 デザイン科 Host, Design program, Tokyo GEIDAI

須永剛司 Takeshi Sunaga

寺田健太郎 Kentaro Terada, リトル太郎ピーター Taro Peter Little

小金澤京 Miyako Koganesawa

- ・東京藝術大学 Israeli student support, Global Art Crossing Project (GAC), Tokyo GEIDAI

赤坂有芽 Yume Akasaka

※本プログラムの展開に協力いただいた当該課題に関わる活動を行っている社会実践グループや個人の方々

02.

生みだされたもの

Outcomes

チーム別参加者

Team A

デザインパートナー：たいとこネット 下町こども食堂 みらい 学習支援と子ども食堂

野本かもめ	東京藝術大学大学院	デザイン専攻 修士 2 年
アインルージュ 葵 汝之 Kim Sereo	東京藝術大学大学院	デザイン専攻 修士 1 年
青山理沙子	ベツアルエル美術デザイン大学	Visual Communications, Bachelor
Alexandra Rupp	東京藝術大学	デザイン科 学部 3 年
	東京藝術大学	デザイン科 学部 3 年 留学生

Team B

デザインパートナー：みんなのキャンパス 八王子ファミリーハウス

中村奈菜美	日本 IBM / takram	
森岡美樹	東京藝術大学大学院	先端芸術表現専攻 修士 2 年
Itamar Frachtenberg	ベツアルエル美術デザイン大学	Industrial Design, Bachelor
久古はる香	東京藝術大学	デザイン科 学部 3 年

Team C

デザインパートナー：石田貴宏さん家族、台東ババコミュニティ

Linawati	東京藝術大学大学院	デザイン専攻 修士 1 年
Noam Tabenskin	ベツアルエル美術デザイン大学	Industrial Design, Master
天野信子	東京藝術大学	デザイン科 研究生
橋本瞭	東京藝術大学	デザイン科 学部 3 年

Team D

デザインパートナー：新城まちなカレッジ、新城 Paser Base コミュニティづくり

ルーサカ 楼婕琳	東京藝術大学大学院	先端芸術表現専攻 修士 1 年
美苑好	東京工業大学大学院	建築専攻 修士 1 年
宮下珠実	東京藝術大学	デザイン科 学部 4 年
岡村綾華	東京藝術大学	デザイン科 学部 3 年

Team E

デザインパートナー：新城まちなカレッジ、新城 Paser Base コミュニティづくり

タンヤイ 唐雅怡	東京藝術大学大学院	デザイン専攻 修士 1 年
植松洸貴	東京工業大学大学院	経営工学専攻 修士 1 年
平山義活	東京藝術大学	デザイン科 学部 4 年
川畑那奈	東京藝術大学	先端芸術表現科 学部 1 年

Team A

SPOTS

子ども食堂 みらい

大学生が参画する子ども食堂運営



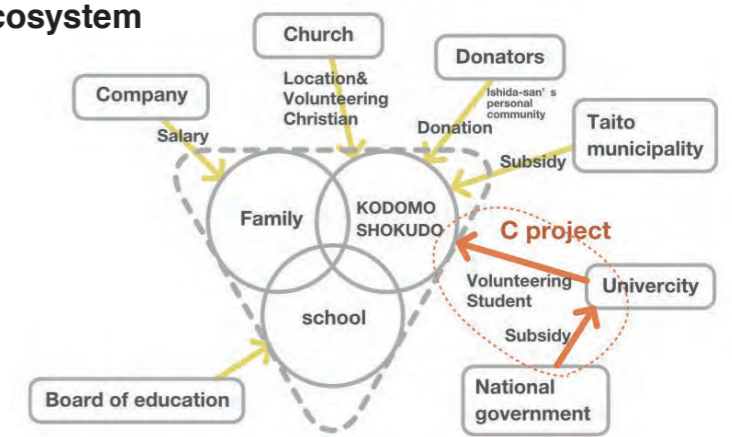
デザインしたのは大学生が参加する無料学習支援のプログラム。今、行われている学習指導プログラムに大学生たちが参加する仕組みをデザイン。その参加に生まれる2つの可能性を提示。ひとつは、大学生たちが社会的課題に触れる場が生まれること。もうひとつは、学びに来る子ども達（小中学生）が数年先の自分たちの役割モデルに気づくこと。

パートナーは「たいとこネット」の石田真理子さん。彼女の運営する「下町子ども食堂 みらい」の活動に参加し、その体験をもとにデザインしたのが、この子ども食堂につくる学びの次世代モデル。



PRESENTATION

Design Ecosystem



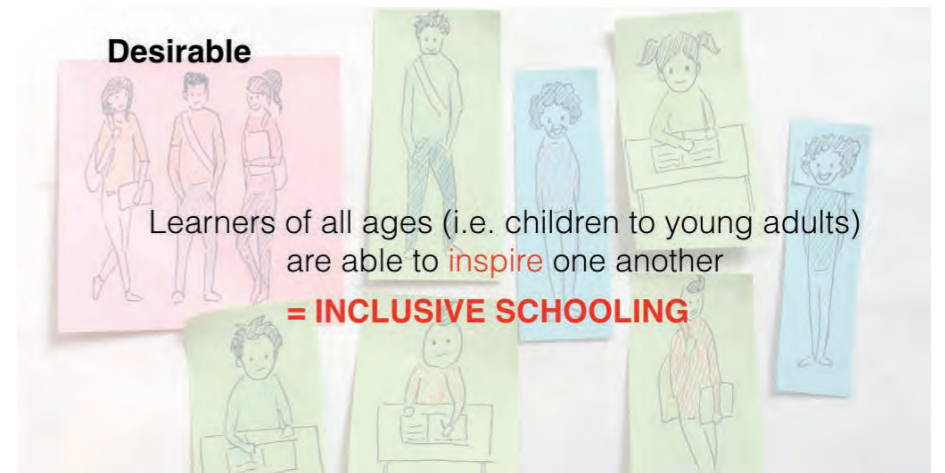
Issue 1

Kids lack **role models** { young adults (i.e. uni students) can relate to + look up to encouraged to take higher education



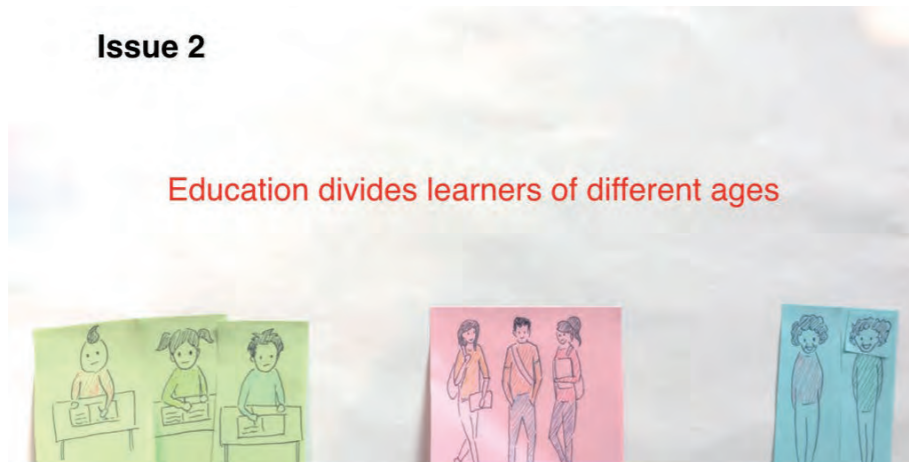
Desirable

Learners of all ages (i.e. children to young adults) are able to **inspire** one another
= **INCLUSIVE SCHOOLING**





Design Ecosystem



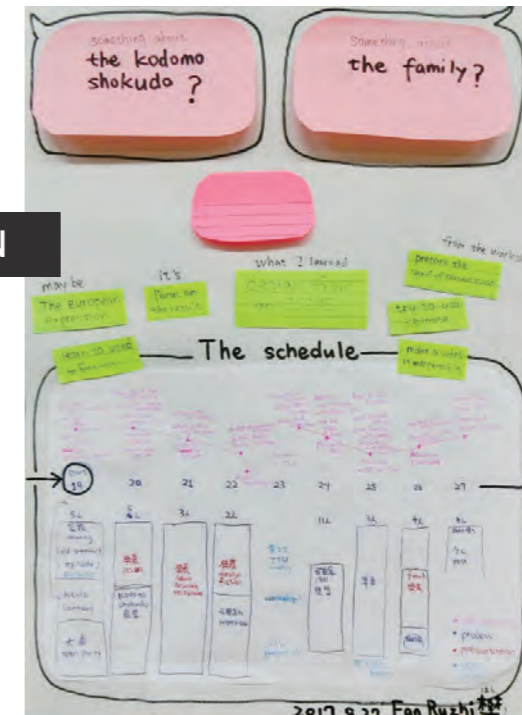
Issue 2

Education divides learners of different ages



Thank you!

REFLECTION

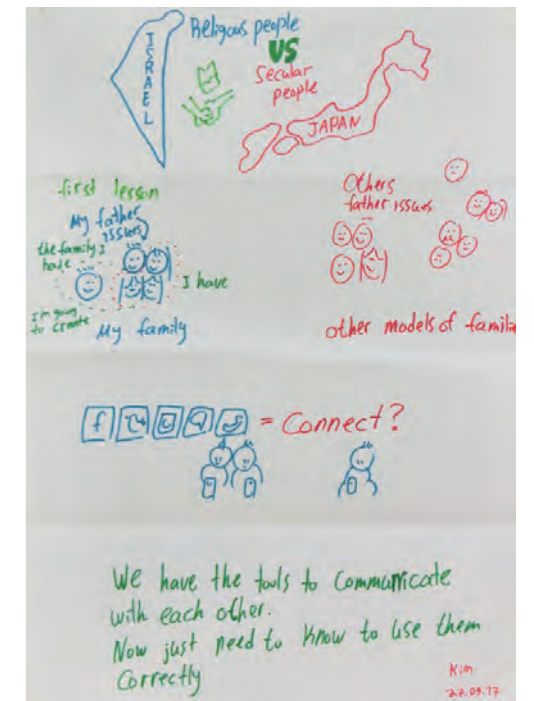


イスラエルと日本の文化の違いを感じて面白かった。

Kim Serero

英語でプロジェクトできたのがとてもよかった。

Ruzhi Fan



Provide not only food but better living.

Risako Aoyama



MEMBERS



Ruzhi Fan

Kamome Nomoto

Risako Aoyama

Kim Serero

Alexandra Rupp

Team B

MEMOR

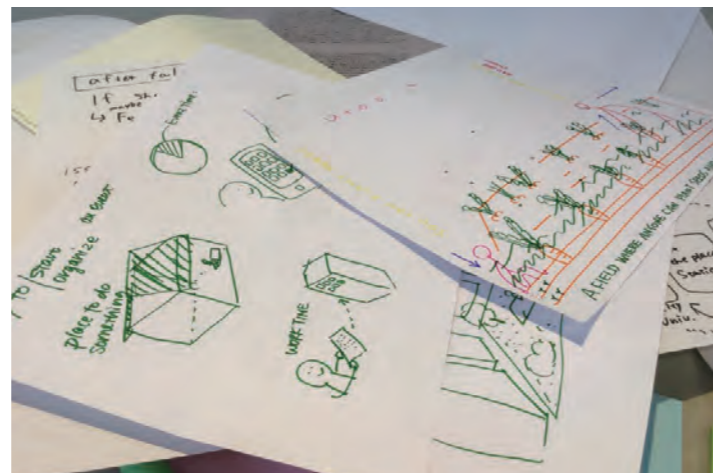
MEMOR_Festival Box

お父さんがパーティを創るしくみ

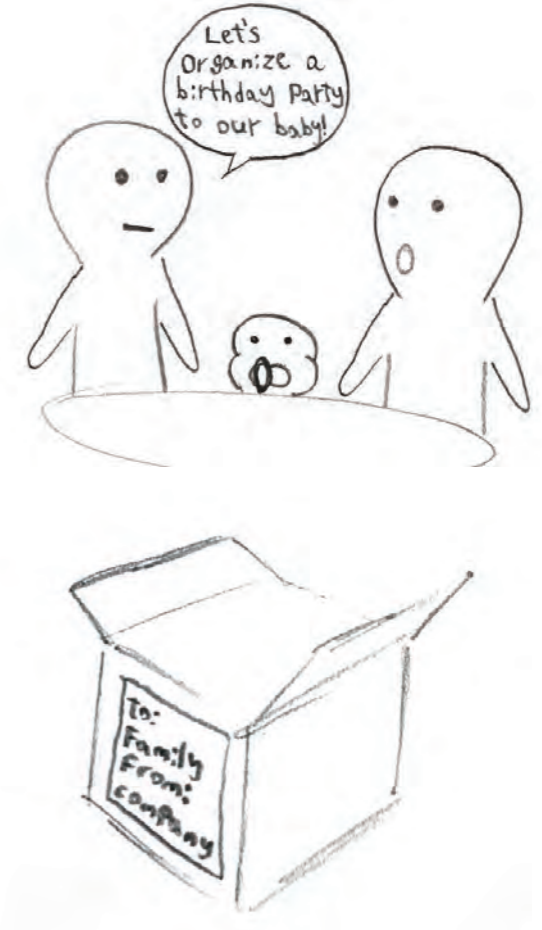


デザインしたのは家族パーティづくりの小物たちと楽しみ方マニュアル一式が入ったボックス。ねらいは、父親たちがこのボックスを手にすること。そして自ら家族の楽しい時間をつくりたくなること。つくれること。ある会社で家族持ち男性社員にこのボックスを配ってみる実験もやってみた。

パートナーは田中久乃さん。”八王子ファミリーフェス・みんなのキャンパス”を主宰する彼女のパワーと経験が、このデザイン展開を後押ししてくれました。田中さんは日立製作所のデザイナーでもあります。

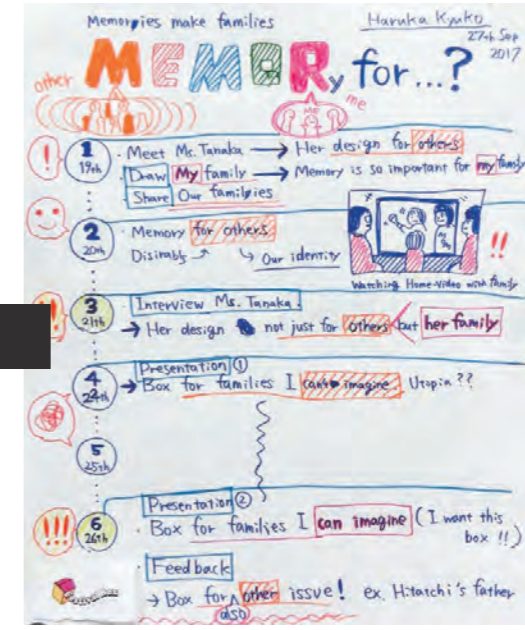


PRESENTATION





REFLECTION



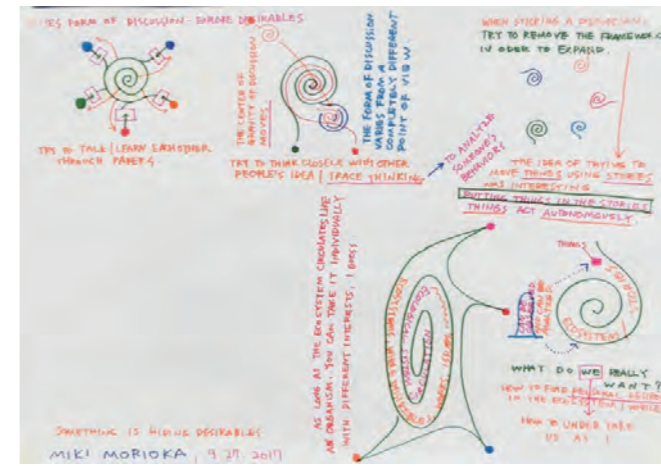
自分のためのデザインと他人のためのデザインを行ったり来たりした。

Haruka Kyuko



楽しくデザインをする。それって、New method だった。

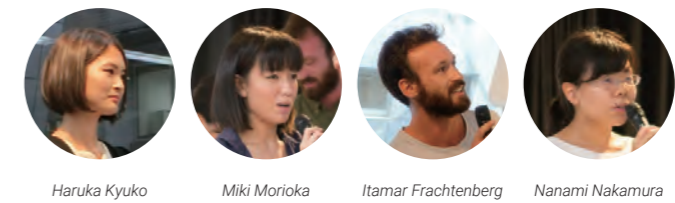
Itamar Frachtenberg



人が何をつくるのか。どういふふうにつくるのか。それを近くで見れたこと、よかった。

Miki Morioka

MEMBERS



Haruka Kyuko

Miki Morioka

Itamar Frachtenberg

Nanami Nakamura

Team C

Kibbutz

Tokyo Family 2030:

家族の1日——20世帯が住む共同住宅

デザインしたのは、20家族が住む共同住宅の日常。建物の各フロアは「屋上庭園・仕事場・共同のキッチンと居間・住居・保育園・銭湯・地域との交流スペース」で構成。この多層空間を活用することで生まれる家族たちのコンビニアルな（自立し共生する）日常をデザイン。ふたりの子がいる家族のある1日を物語として表現しました。

デザインパートナーは谷中に住む石田さん一家。彼らが家族になるとも大事な出来事「ある日、貴宏さんが保育園の送り迎えを始めることになった事件（“フランス革命”と呼んでた）」を話してくれた。あーこうやって、家族をつくっているんだなと知りました。

This co-housing complex consists of "roof garden, work space, houses, nursery, SENTO co-bath room, and play ground for public in the area." Residents of this house alive everyday based on fully using the facilities and services in the complex. Following slides shows an outcome of our project through the story of one day of a family having two kids.



PRESENTATION

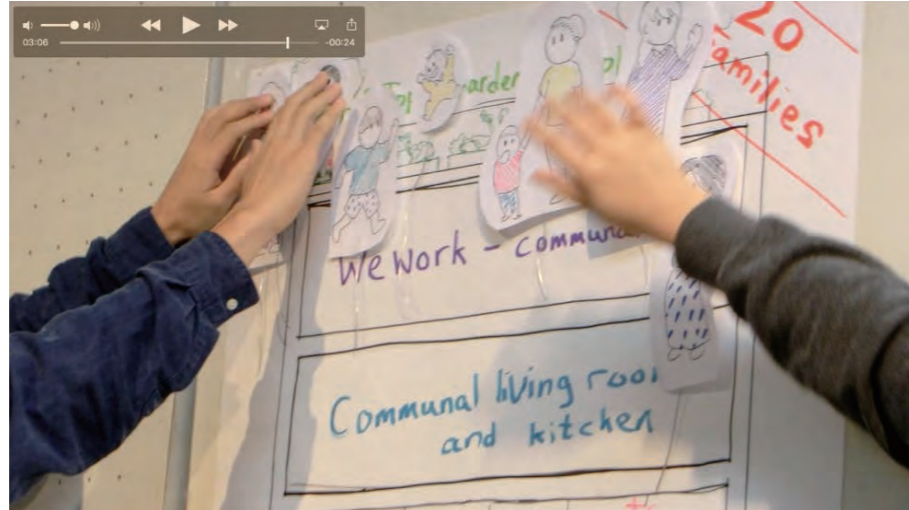


Dad: good morning sweetie
 Mom: good morning dear, can you take the kids to school today? I will put the baby to the nursery and go up to work.

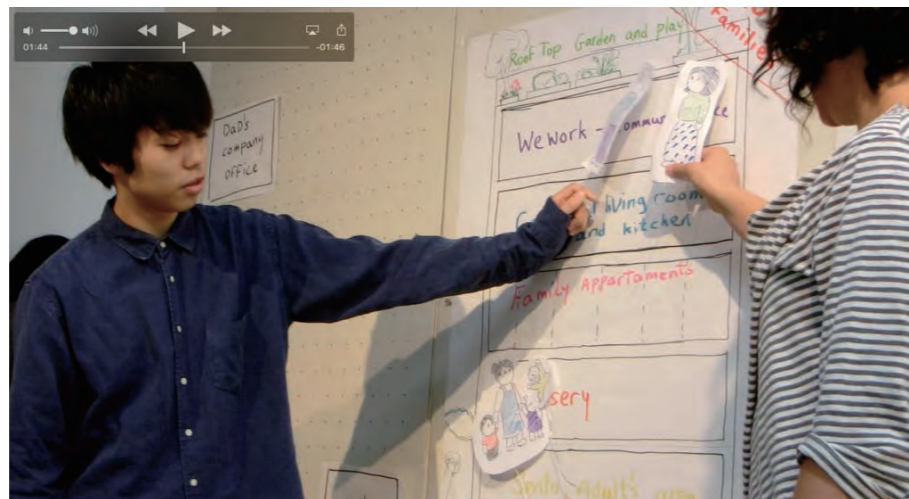


(Dad is taking kids to school and going to co-working space)
 (Mom with baby going to nursery)

02. 生み出されたもの



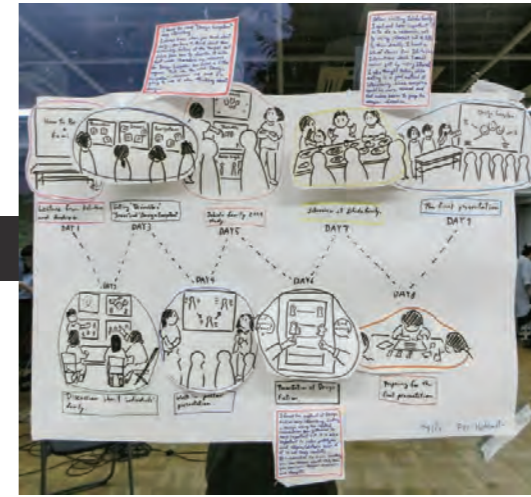
Mom: Hey! I am so happy you came, sorry about the mess- it was a busy week.
 Miss Fukazawa: Don't worry about it - you know how much we love being here.(Eating together, than kids go to play, adults talk)
 Dad: I love the way the kids play together and we can talk



Dad: are you hungry dear? Let's go to have lunch.
 (Going down to coffee shop)

02.Outcomes

REFLECTION



石田さんのお宅におじゃまし、直接に話をすること、それもデザインだったんだ。

Ryo Hashimoto

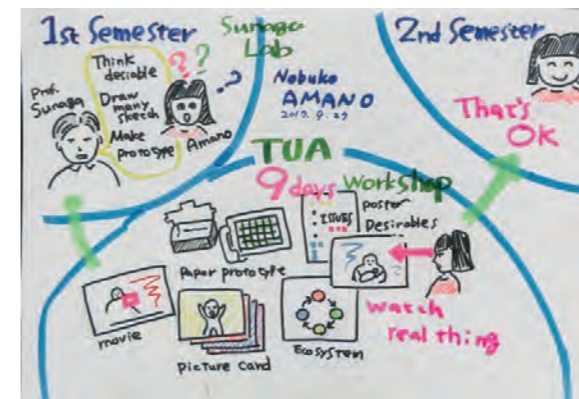
「家族」って何?って本当に考えた。

Linawati



研究生の1年間の真ん中にこのワークショップがあったこととてもよかった。

Nobuko Amano



メンバーに「野編 Field Knit」という名前をつけてもらった。個人の小さなことから始めて、そこから大きなマップを描くことができた。

Noam Tabenkin



MEMBERS



Ryo Hashimoto

Linawati

Nobuko Amano

Noam Tabenkin

Team D

Conne-Phone

Gravity Space

答えではなく 答えを知っていそうな住民を教えてくださいAI電話

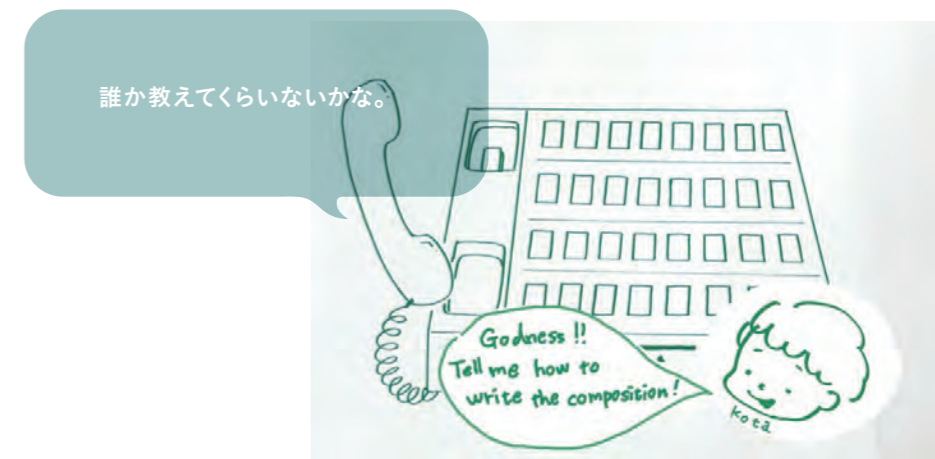
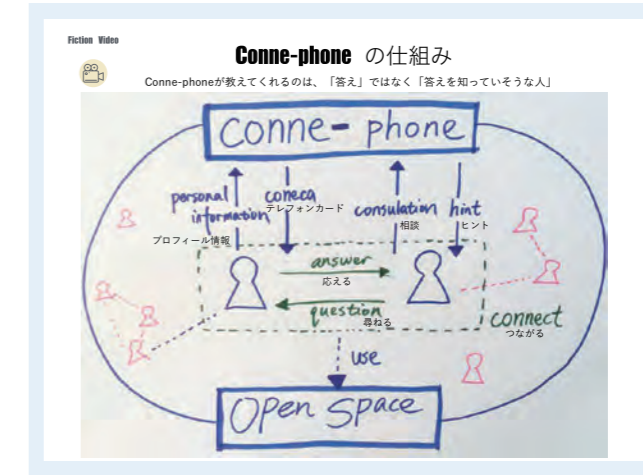


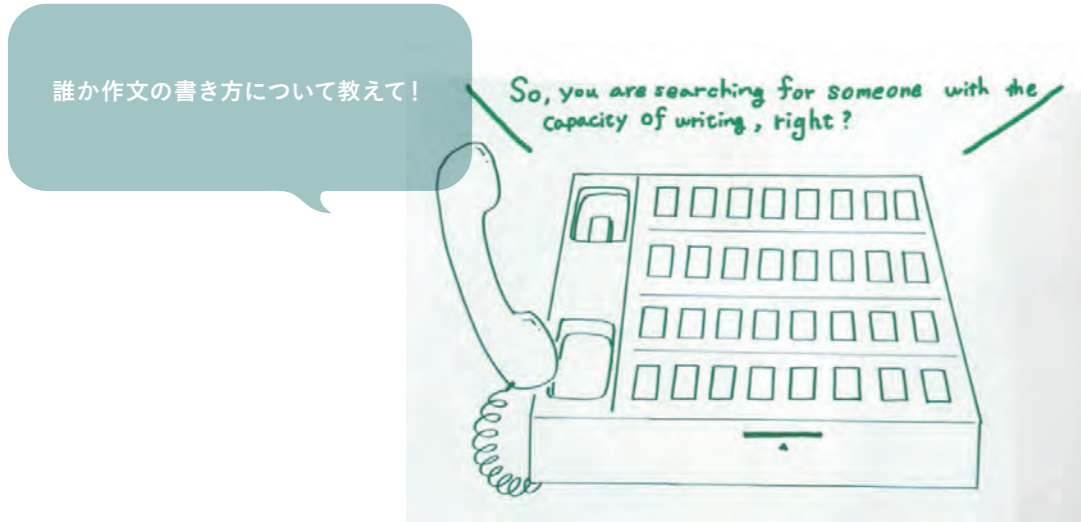
デザインしたのは共同住宅に住む家族たちがつながり合うためのコミュニケーションツール。それは、だれかが、知りたいことを尋ねると、「その答えを知っている」はずの住人を紹介してくれる」知的サービス。問いの答えを「システムが教えてくれる」のではないところがこのデザインのミソ。

パートナーは川崎市の「新城まちなカレッジ」のメンバー。5人の“おとうさん”が仕事の帰りに“Pasar Base”に集まり、それぞれの家族づくりへの思いを語ってくれた。それがこのデザインのコンセプトになった。

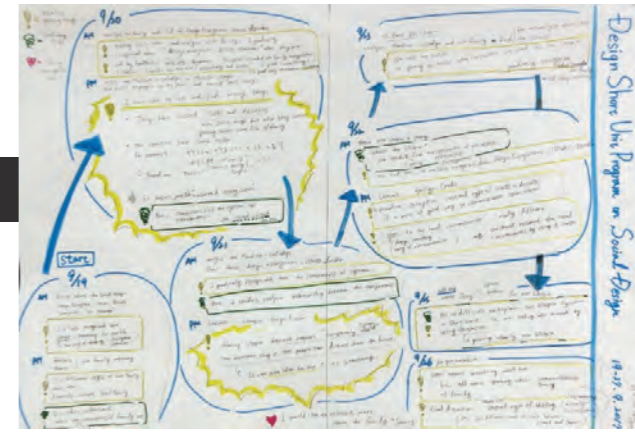


PRESENTATION



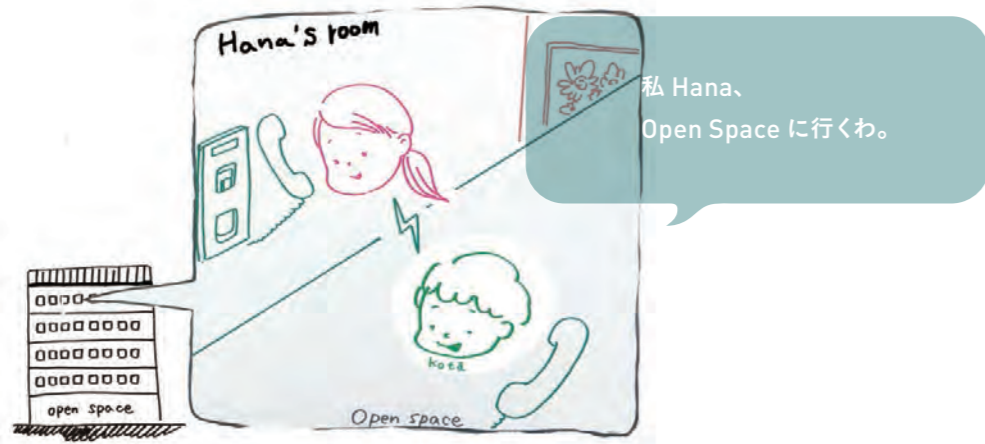


REFLECTION



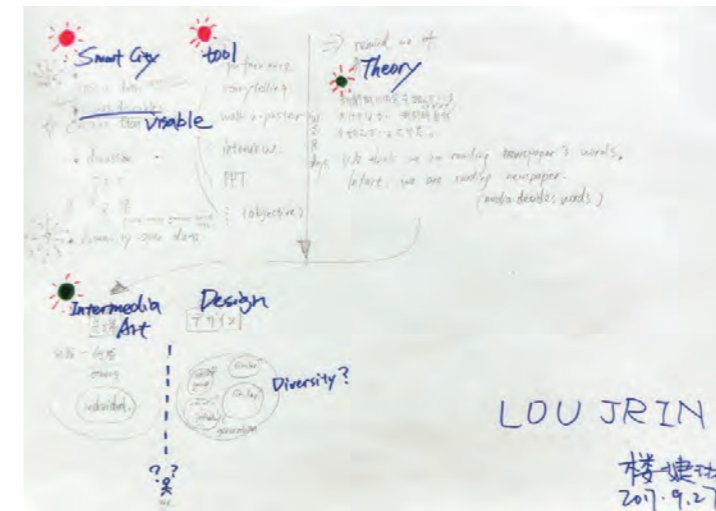
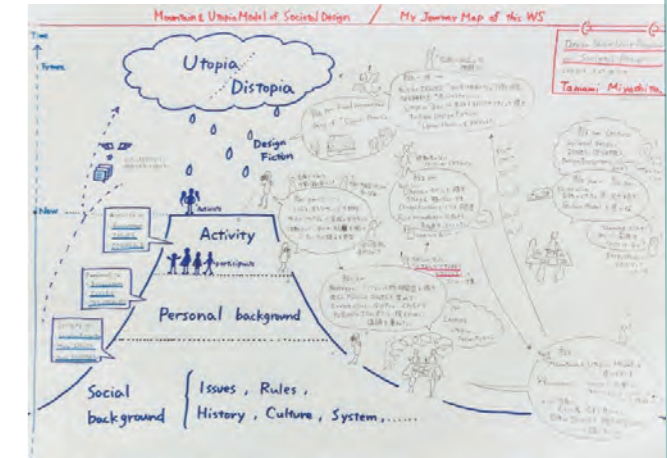
どう成り立っているのか。現実と出会うことってこういうことなのかとわかった。

Ayaka Okamura



UTOPIA / DISTOPIA って何かわかった。私のインサイト。

Tamami Miyashita



これまでは「自/他」が表現のベースだったけど、「グループの中で」という表現のかたちを知った。

Saka Lou



MEMBERS



Ayaka Okamura

Tamami Miyashita

Saka Lou

Wanyu Jiang

Team E

MIRAI

Letter from Father

父親と家族の結びつきを取り戻すためのしくみ



デザインしたのは、父親が家族と言葉をかかわす機会をつくり出す”手紙”サービス。働くことに専念し家族の中で孤立する父親。「そんなお父さんをお母さんと私に結びつけたい」そんな娘の心の奥にみつけた小さな思い。それに気づいたことがコンセプト。チームメンバーの心に隠れた小さな思いを種に、新たなサービスを描いた。そのビジョンは、家族それぞれがもっている心の奥を深く省察する作業から生れ出たんだ。

パートナーは川崎市の「新城まちなカレッジ」のメンバー。5人の”おとうさん”が仕事の帰りに”Pasar Base”に集まり、それぞれの家族づくりへの思いを語ってくれた。それぞれの”お父さん”がそこにいた。それに気づくことがこのデザインのコンセプトになった。



PRESENTATION

Kawabata family

とある川畑家の状況

episode①

Family members : gather in grandmother's house

Father: stay in Hokkaido for his work

Balance between work and family in KAWABATA

川畑家の仕事と家庭のバランス → 牧場経営

Mother (smiling face)

- work
- housework
- takes children to school

Work < Family

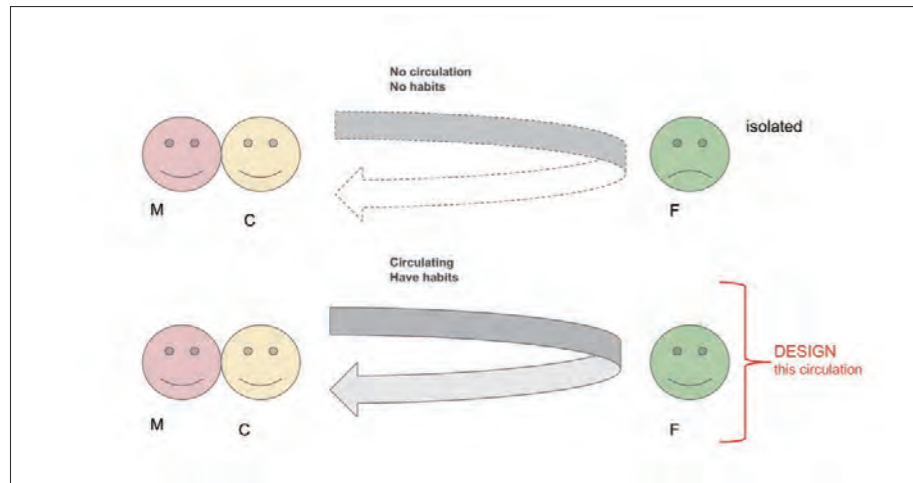
much easier for children to be involved (smiling face)

Father (neutral face)

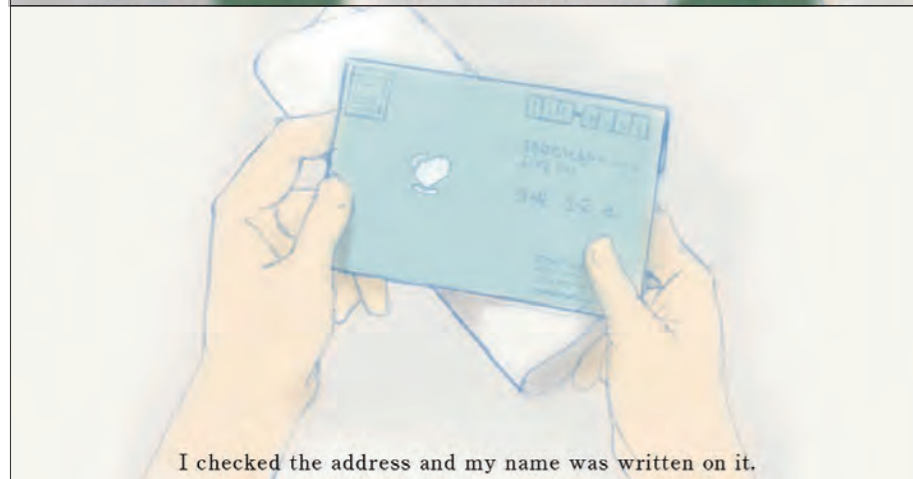
- work

Work > Family

much HARDER for children to be involved (sad face)



I got one letter when I am so busy for the preparation for Geidai festival.



I checked the address and my name was written on it.

REFLECTION

OUR DESIGN PROCESS ← THE VALUE I GAINED!!!!

- ① WHAT KIND OF FAMILY SHOULD I HAVE IN OUR FUTURE?
→ we got a common ideal for family
- ② FOR THAT, WHAT WE CAN CHANGE?
→ We got a common ISSUE.
- ③ TO SOLVE THAT ISSUE, WHAT KIND OF "DESIRABLES" IN OUR FUTURE?
- ④ WE FOUND A FATAL PROBLEM THAT IMPEDES SOLUTION.
1. Little contact with parents.
2. Stopping writing letters for feel it too troublesome.
- ⑤ TO SOLVE THAT NEW ISSUE, WHAT KIND OF "DESIRABLES" IN OUR FUTURE?
- ⑥ WE DREW A SPECIFIC SOLUTION.
Yoshikatsu Hirayama (team MIRAI)

Desirable をつくと、そこにまた新たな Issue が見えてくる。

Yoshikatsu Hirayama

言葉って大事だなと思いました。

Nana Kawabata

My most important insights /29 Team E

Family issues need to be thought from a point of view of macro

Tokyo TECH Industrial and Engineering 1-2 Uematsu Koki

Our team went to Shinji-machi college and heard about breeding children from some fathers. And when I hear about other team presenting I thought family issues are not only solved by only each families completely. They may need helps from government, because some issues e.g. money, nursery school and so on, partly need their assist. Though it's important to consider about our own family issues, to apply for government assists are maybe a shorter ways.

The workshop's way helps us when we consider about issues...

In the workshop, we considered and macro thought "Issues", "Assembled" and "Design Ecosystems". We invented primal issue by using this way. I think it was good. But, to invent solution is as important as to invent issue. So this way will become better by using with other problem solution way.

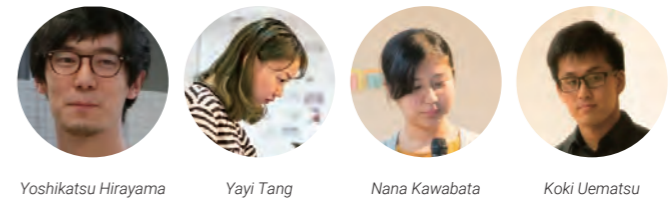
Motivation Journey Map



家族をテーマにしても、そこに社会をマクロにとらえる解が必要なんだと気づいた。

Koki Uematsu

MEMBERS



Yoshikatsu Hirayama Yayi Tang Nana Kawabata Koki Uematsu